

教養英語教育充実のための全学的な英語多読指導の成果と課題 —オンラインシステムを活用した実践—

Results and Issues of All-University Extensive Reading to Improve English Language Education — A Practice with Online Systems —

佐藤 大介^{*1}・福島 治子^{*1}・森岡 悦子^{*2}・笠本 晃代^{*2}

Daisuke SATOH・Haruko FUKUSHIMA・Etsuko MORIOKA・Teruyo KASAMOTO

Abstract

The purpose of this paper is to describe how we conducted extensive reading (ER) in order to improve English language education in Kurashiki Sakuyo University and Sakuyo Junior College of Music in the first term (from April to July) in 2017. Our study offers an analysis of a grand total of 733 students who belong to 5 different departments and do not major in foreign language. We attempted to practice ER by introducing 3 online systems; M-Reader, ERF Placement Test, and NetCommons 2. These systems provided the students with a variety of easy-to-read English books and helped them get better ideas of the value of ER, as well as tips about how to increase their English reading — from making appropriate book choices to increasing their reading speed. As shown in several previous studies, as a result, ER encouraged them to read their favorite books with their reading proficiency, and changed their reading from word-to-word translations to direct comprehension of English texts. At the same time, however, we found that some issues in practicing our all-university ER such as promotion of education guiding system, closely cooperation among the teaching staff, and so forth.

1. はじめに

中学校や高等学校（高等専門学校を含む）、大学といった様々な教育機関において様々な学習者レベルを対象に英語多読指導は実践されており、その効果や指導上の工夫などについて多くの著書・論文等で議論されている。こうした検証や実践は限定的なクラスや学生に対して指導がなされているものがほとんどで、その効果を検証しているものが多く、蓄積された英語多読指導の成果は大変参考になる。しかしながら、大学において英語や外国語を専門としない学生に対して、全学的に英語多読教育を導入したという報告は確認できなかった。

そこで、本稿では、M-ReaderとERF Placement Testの2つの無料のオンラインサービスとNetCommons 2をインストールした独自サーバーを活用した英語多読教育を全学教養英語教育として位置付け、学生の所属学部や学年、教員の常勤・非常勤等に関わらず、2017年度前期に展開したくらしき作陽大学・作陽音楽短期大学（以下、「本学」という。）の取り組みについて、教員の立場から成果と課題を検討し、全学で取り組んだ英語多読教育について考察する。

2. 英語多読教育の全学展開の経緯

ここでは、英語多読教育を全学展開するまでの経緯と背景について概観する。

まず、本学附属図書館では、2002年から2005年にかけてGraded Readers等の英語多読用図書の蔵書を強化しており、1,149冊ものGraded Readersや一般洋書、英語絵本などが蔵書されていた。しかしそれ以降授業等で活用されたことは確認できず、2015年度の年間の貸出冊数も延べ132件（教職員

^{*1} くらしき作陽大学 子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

^{*2} くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学 非常勤講師 Part time teacher (Kurashiki Sakuyo University and Sakuyo Junior College of Music)

や一般利用者への貸出も含める)となっており、ほとんど活用されていない状況であり、2016年4月時点では、それらのほぼ全てが書庫に保管されていた。大学が保有する資産である蔵書を生かし、全学教養英語教育の充実につなげられるのであればと考え、附属図書館と協議し、全ての英語多読用図書を2階の一般書架に移動してもらい、学生が利用しやすい環境を整えた。

次に、本学における英語多読実践については、寺西ら(2004, 2005)によって英語多読指導の実践がまとめられている。寺西ら(2004)では、本学の学生に対して実施した多読授業において一応の効果があつたと述べている。ただし、リスニング能力の低下が見られたことから今後の課題として「多聴」の必要性について言及している。また、寺西ら(2005)では、電子辞書の導入が多読を実践する学習者に与える効果について分析・考察しており、電子辞書により多読・速読を促進する可能性があることを指摘している。しかしながら、両研究とも、特定の学部学生または特定の授業の履修学生が対象であつたことから、全学的に導入した検証とは言えない。ただし、こうした調査結果から、英語多読教育は本学においても有効であると考えられる。

さらに、2016年度、著者(佐藤)による英語多読指導を行った。前期開講の英語Iおよび後期開講の英語IIを履修する食文化学部1年生76名、子ども教育学部1年生66名、計142名に対して1年間(夏期学生休業期間を除く)英語多読を授業の一環として導入した。なお、前期のみではあるが、英語IIIを履修する子ども教育学部2年生40名にも導入した。Graded Readers等英語多読用図書については、年度途中に附属図書館に追加購入し、2,018冊の図書で行った。多読の取り組み方法や評価について説明を行い、実際に図書館では配架場所やGraded Readersのレベルや語数の確認方法等について指導を行った。学生は、Google Formを活用し作成したオンライン上の専用の読書記録フォームに随時読書内容を入力する形とした。記録方法として、1冊ごとに記録していくこと、途中でやめた本についても記録すること、読んだ語数を正確に記録すること、といった3点について求め、学生には以下の項目を記録してもらった。

- ・学籍番号
- ・多読の種類：Graded Readers／その他の洋書(絵本を含む)または英字新聞・雑誌／ウェブサイト
 - 「Graded Readersの場合」
 - ・本のタイトル
 - ・シリーズ／出版社
 - ・Level / Stage / Grade
 - 「その他の洋書(絵本を含む)または英字新聞・雑誌の場合」
 - ・洋書・絵本のタイトル／新聞記事・雑誌の見出し
 - ・出版社／発行元
 - 「ウェブサイトの場合」
 - ・ウェブサイトのタイトル
 - ・ウェブサイトのURL(アドレス)
- ・読み終えた日
- ・読んだ単語数
- ・読んだ本の評価(5段階評価)：英語の難易度、あなたの興味・関心、他人への推薦度
- ・本の感想や英語学習のメモ

以上の項目から分かる通り、英語多読教材として、Graded Readers以外にも洋書や英字新聞、ウェブサイト等での英語講読についても許容した。学生に対しては、自身の読書記録が確認できるよう、個票を作成・印刷し、毎月配布した。なお、授業時間内で英語多読に関する指導はほとんど行っておらず、学生は授業時間外学習として取り組む必要があり、各授業において半期80,000語＝30%の割合で評価に加味することを事前に伝えていた。

その結果、1年間取り組んだ履修学生の前期・後期を合わせた平均読書語数は145,398語となって

おり、目標値である半期80,000語を前期も後期も超過している学生は67名おり、全体の約47%が目標を達成していた。一方で、前期・後期合わせて0語という学生も4名おり、年間10,000語以下という学生は、0語の学生を含めて27名いた。受講後アンケートを実施した項目のうち、読書語数と「自分の英語力を高めたいと思っている」という項目は有意な相関関係にあった。また、「文脈から単語の意味や物語を推測する力が身に付いた」、「速読力が身に付いた」、「英語に慣れることができた」といった自由記述も見られた。これは、英語力向上のために英語多読を授業として取り入れることが本学においても意義があると考えられる。ただし、語数のみを評価対象としているため実際に読んでいない本を語数のみ登録した場合の対処が不十分であること、語数情報が手に入らない本については学生が単語を数える作業に疲弊してしまうこと、蔵書が不足しているため自分のレベルに合った多読を進められないことなど、課題も明らかになった。

3. 全学教養英語教育への導入

本学では、2016年度に全学共通英語教育コア・カリキュラムを作成し、2017年度は試行実施している。その一環として、英語多読を全学で共通して導入することとした。教養英語教育において全学で統一して実施するためには、専任教員（2名）、非常勤講師（3名）を含めて、全員が同じ環境で取り組むことが必要である。そこで、3つのオンラインシステムを導入・活用した。なお、2017年度の本学の教養英語科目は英語I/II/III/IV/V/VI（日本人教師が指導）および英会話I/II（外国人教師が指導）があり、以下、前者のうち前期に開講した英語I/III/Vでの実践について述べている。

1つ目は、Graded Readersの各本に関連したクイズに解答し合格すると語数が追加されるオンライン上の読書記録管理システムM-Reader (<https://mreader.org/>) である。M-Readerは多くの大学において英語多読記録に活用されている。M-Readerの活用により、学生は読書語数を数える作業がなくなり、また、本文理解の必要性を意識することができるようになる。さらに、M-Readerでは学生の読書記録はリアルタイムで反映され、学生も教員も確認することができ、学習成果の可視化につながる。以前の方法では、学生は専用フォームに入力した記録は月に1回個票が配布されるのみで、各自で自己管理する必要がある、また、教員も読書記録を調べるために毎回Google Formからデータをダウンロードし集計・処理し個票を作成する必要があった。

2つ目は、Graded Readersのレベルと学生の多読に必要な能力を測定し最適な本を選択することができるオンライン上の多読レベル測定システムERF Placement Test (<https://erfpt.ealps.shinshu-u.ac.jp/>) である。2016年度は学生にGraded Readersのレベルを抽象的な説明のみで判断させ選択させており、正しい判定ができていないのではないかと感じていた。そこで、2017年度はERF Placement Testを活用し、多読開始時に測定テストを受けることにより、学生は主観的に多読レベルを判定するのではなく、客観的な基準に従いGraded Readersのレベルを選択することができるようになる。

3つ目は、M-ReaderにクイズがないGraded Readersを読んだ際に、語数が追加できるようにするため、国立情報学研究所が開発したNetCommons 2を独自にサーバーにインストールし、登録モジュールを活用して語数の追加申請ができるようにした。これにより、学生はクイズの有無に関わらずGraded Readersを自由に選択して読むことができるようになり、また、申請された語数は教員が確認（確認内容は後述）の後、M-Reader内の“Give extra credit”機能を用いて、Awardとして語数追加をした。なお、M-Reader上でもクイズのない本や語数を学生が登録することができる機能はあるが、不正等の観点から利用について推奨されておらず、M-Reader上での登録はできないようにした。

上記のシステム導入・基本設定が完了の後、非常勤講師に対して、専任教員より英語多読導入についての趣旨を2016年3月に説明し、全ての教養英語の授業でAppendix（一部削除または非開示）に示す説明資料を学生に配布し説明した。学生は資料に従い、まずM-Readerでのアカウント作成やERF Placement Testでの現在の多読レベルの確認を行い、各自多読活動に取り組んだ。評価については、M-Reader上でクイズに合格した語数、クイズに失敗した本の語数と正答率、M-Reader上にクイズのない本の語数など総合的に判断した。全授業共通の評価基準を設定し、単純に語数のみで評価

表1 2017年度前期英語多読取り組み学生数

所 属	1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生 以 上	合 計
音楽学部 音楽学科	28	39	3	5	75
子ども教育学部 子ども教育学科	139	139	35	0	313
食文化学部 栄養学科	95	43	20	2	160
食文化学部 現代食文化学科	51	42	12	5	110
短期大学 音楽学科	61	13	1	0	75
合 計	374	276	71	12	733

するのではなく、学生の取り組みを総合評価し、全体評価は専任教員が行い、各英語担当教員に対して、総語数を明記しない形で得点率のみを報告する形を取った。

2017年度前期（2017年4月10日～7月31日）に英語多読に取り組んだ学生は全体で英語I～VIまでの21クラス733名であった（表1）。これは、本学に在籍する1,430名（大学院生を除く）のうち51%の学生、つまり半数以上の学生に該当する。なお、2017年度前期に開講した1クラスについては、授業内容との整合等の観点から担当教員と協議し、学生には資料説明のみとし、成績評価の対象とはしない形での導入となった。なお、利用人数増加に伴い、大学図書館でのGraded Readersの配架については、さらに学生が利用しやすいスペースに移動し、貸出冊数についても2冊までと制限することで、より多くの学生が利用できるようにした。

4. 全学導入の成果と課題

4.1 成果

（1）学生に対する教育的効果

学生は4月に初めて英語多読を始めた際、多読の最大の目的である速くたくさん読むことに躊躇する者が若干名見られた。とりわけ、中学校や高校学校で授業の予習をする際に、丹念に辞書を引き、和訳をする習慣が身に付いた学生にとっては、逆に全体を把握しながら読み進めていくことが難しく感じられたのであろう。前期の最後の授業時で、15回の授業を振り返って感想を書いてもらおうと、次のようなものが見られた。

- ・多読というものがあり、するのが初めてで、本を読むのにとっても時間がかかり、クイズにもなかなか正解することができず、目標の語数までたどりつかなかった
- ・多読では英語の物語を絵本で読むのは初めてで、本のレベルが上がると文も長くなって、読解がとて難しかった
- ・4・5月は多読のやり方がわからず、全く手を付けていなかった。6月に入ってやり方がわかり、毎日読んだ日もあったが8万語は追いつけなかった。読むのは苦手なので、1冊1000語ほどの本を何冊も読んだ
- ・多読活動は本を読むのにすごく時間がかかりました。わからない単語を調べたりして、自分なりに読んでクイズに答えるのはすごく大変でした

上記の感想から、本を読む習慣があまりない上に、その本が英語で書かれている、そして内容を把握しているか確認するクイズがあるため、それぞれの場面で多読に苦戦した様子がうかがえる。しかし、精読と多読の違いを説明し、それぞれに目的が違うことを伝えたと学生は安心した様子も見せた。また、1冊の本に時間がかかっている学生については、場合によってはより興味がある本に変更するようアドバイスしたり、読んでいる本によって目安になる時間を示したりするなど徐々にではあるがスムーズに読み進められるようになっていった。ゴールデンウィークを過ぎた辺りから、学生が休憩時間や授業の空き時間を利用して、図書館内だけでなく学生の学習スペースや学生食堂等で多読をする姿をよく目にするようになり、次第に自らのペースで読書習慣を身に付けていく様が観察された。

6月の半ばになると、前期の多読の締め切り日まで残り約1ヶ月ということもあり、どのクラスにおいても果敢に多読に取り組む姿が見受けられた。この頃には学生の読書量が格段に増し、最終的に7月末の時点では多読開始前と比較してかなり速読の力がついているものと推察される。こうして、その苦しい段階を乗り越えた学生には、次のような感想も見受けられ、その面白さや、達成感、自ら苦手なものに日々取り組み、そのレベルも上がってきたという実態など、自分自身の姿勢の変化や英語の力が伸びているという実感を持つことができるようになっていく。

- ・私が一番苦労したのは多読です。はじめは頑張ろうと思って何度もやりましたが、何回やってもsorryばかりでてきて心が折れてしまい、ずっとやっていませんでした。でも最近は図書館にこもって、たくさん読んでちゃんと理解してクイズをすると合格できるようになったので嬉しかったです
- ・多読も最初は意味が分からなくてあきらめたり、読めないから無理だと思ったりもしたけれど、ちゃんと意味を理解してやってみると案外おもしろくてビックリした。前期の授業のうちに8万語はもう無理だと思うので、もっと早くからやっておくべきだったなと今更後悔した
- ・多読では、私は英語が苦手という気持ちがあり、ほとんど手を付けていなかった。しかし、やらなければと思い、最初は簡単な本から始めることができた。クリアできたときはうれしくて次からは毎日こつこつとするようになった。気づけば文が長い本にも挑戦できるようになっていた。8万語まであと少しなため、残りの時間を使って8万語いけるようがんばる。今では苦手だった英語に自分から進んで取り組んでいることに自分自身が一番驚いている
- ・多読もはじめに聞いたときは絶対無理だと思ったけれど、やってみるとわかりやすいものもありたりしたので、最後はとても楽しかった
- ・多読を通して英語を読むスピードが速くなったので成長できたと思う
- ・多読や単語テストなどにより自分の英語力が上がったと思う
- ・多読では日ごろからの英語にふれる時間を設け、読む能力や対応力が身に付いた
- ・英語の本＝読めない！みたいなイメージを払拭できて、実際読んでみると、読める文、単語がいっぱいあり、多読を行う前より読解力は付いたと思う
- ・1個1個わからない言葉の意味を考えるのではなく、1回全部読んでみてある程度の物語の意味をつかむ力を高めることが出来た
- ・小テストのための勉強、多読で80,000語を目指して、日々英語に触れる機会を多く持てたことで知識が身に付いたのではないかと思います
- ・Mリーダーではたくさん本を読むことができた

また、本を読む楽しさや、多読を通して、英語への訳し方を学ぼうとしたり、子どもに読み聞かせをする意識を持ちながら多読を行ったり、教え合いによる理解の深化を図った学生もいた。

- ・多読は元の話を知っているものだったりすると、どういう感じで訳されているかなどを知ることができた
- ・英語の本を読む楽しさなどを知ることができた
- ・多読では自分ができる、読める本を選び、読み、内容を理解し、問題を解くというのは最初は大変でしたが、子どもへの英語を読むための単語の理解ができました
- ・多読という英語の本を読むのは初めてで読めるかなと思っていたけれど、やっていくうちに読めるようになり、読むことが楽しくなったので本当に良かったです
- ・多読の最中でも、分からないところをみんなで教えあったり、教わったりして、理解するだけでなく、人に教えられるところまでできたので、もっと理解が深まった

雪丸（2012）では、英語初中級の日本人大学生を対象にした15週間の多読活動は、一般的な英語運用能力（PPT）や読解の流暢性（ERT）及び学習者の英語学習に対する意識向上に一定の効果があったと言える、とあるが、本学においても同様の成果を得ることができたと考える。

さらに、全学共通での実施を学生が意識することにより、各クラス内における個々のレベルの位置

付けに留まらず、クラスの枠を超えた大学全体での位置付けとして取り組もうとする意欲につながったと考えられ、その結果、学生一人一人が自分自身の意識を高め、可能な限り読書量を増やそうとする姿勢が見られた。英語を不得意とする学生も、自分のレベルに合った本から読み始め、着実に努力をすることで、読書量を増やし、自信へとつなげているようであった。

また、オンライン形式で活動を行うことについては、学生一人一人のペースで多読を進めることができるため、自発的で主体的な学習を促す結果となった。このように、全学共通での体制でオンラインシステムを活用して多読活動を行うことは、結果的に、学生が自主的に多読活動に取り組みやすい環境を作り出すことに有効であった。

(2) 教員および指導体制における連携強化

本学では、これまで英語教育では各担当教員の裁量によって目標を設定し授業を行ってきた経緯がある。しかしながら、こうして全学的な取り組みを進めることによって、教員間に共通の教育課題を意識するようになり、授業目標や教育方針などについて相互に協議し、意見を出し合いながら英語指導についての共通理解へとつなげることができた。また、「2016年度に英語の授業内で多読を経験している学生に関しては、すでに読書習慣が身に付いており、学生の成功体験から2017年度も比較的容易に継続して多読指導を行うことができた」という教員の意見もあり、共通した指導に関わることによって、連携の取れた継続的な英語教育に寄与できると考えられる。

また、共通したオンラインシステムの導入により、大学において一元的に学生の取り組みを管理できるようになったことも教員間の連携強化につながったと考えている。個々の教員が個別のシステムや方法により英語多読指導を行っていた場合、学生がオンラインシステムを利用する際にトラブルがあったとしても、他の教員が即座に対応するのは難しく、非常勤講師の場合は出勤日に対応するか、メール等による連絡での対応が必要となる。しかし、専任教員が中心となってオンラインシステムの運用や全体の評価を行う形を取ったことにより、学生は英語の授業担当教員に関わらず、どの英語教員に対してもトラブルや取り組み方について相談することができる体制となった。これにより、学生はいつでもどこでも安心して英語多読に取り組むことができるようになり、学生の主体的な学びを促す環境作りに寄与したものと考えられる。

4.2 課題

(1) 学生指導上の課題

まず、前期終了後の英語多読の得点率を比較すると図1のような結果となった。1年生(74.0)に比べ、2年生(56.2)、3年生(25.2)、4年生(5.6)と、学年が上がるにつれて得点率が下がっており、その結果が顕著となっている。2年生の感想では、「去年よりシステムが変わってあまりできなかった」「ほとんどできなかった」「どんなふうに進めたらいいのか分からなかった」という言葉が見受けられ、先に挙げた成果とは反対に、昨年度多読に取り組んだにも関わらず、取り組み方から消極的な姿勢が見られる。また、得点率が0、すなわち、全く英語多読に取り組まなかった学生数も3年生以上(3年生11.3%、4年生16.7%)に多く見られた。この結果から、課題として、上級学年になるにつれて英語多読への意欲が下がっている。要因としては、全学的な英語多読教育を今年度より開始しており、前年度までに英語の授業を受けている学生にとって負担感や難しさを感じていることや、前回に単位修得とならず再度履修しているため、英語に対する苦手意識が高いこと等の理由が考えられる。

また、大部分の学生が意欲的に多読に取り組む一方で、残念ながら、多読が全く進まない学生もいた。理由を尋ねると、「時間が取れない」が大半を占めていたが、先に述べた通り「本を読むことに慣れていない」という理由も少なからず聞かれた。前者に対しては、日常生活の中でいかに効率よく多読の時間を確保し、自分のペースを見つけて継続していくかが課題である。後者に対しては、授業時間外における学習を習慣としている学生が少ないため、計画的に多読活動を行う学生に比べ、前期終了直前にまとめて多読活動に取り組む学生が非常に多く見られた。大学全体での取り組みである上

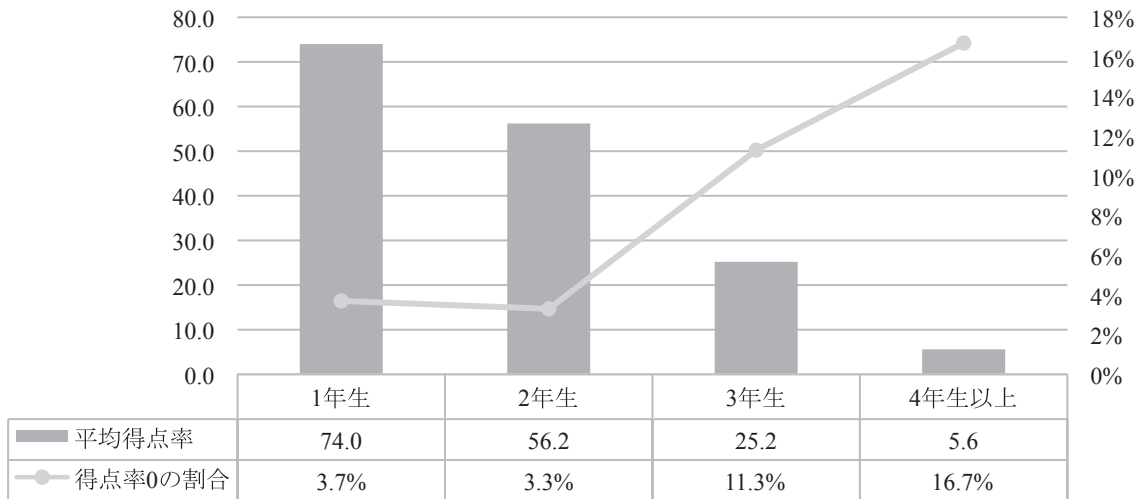


図1 学年別英語多読得点率

に、前期終了直前に図書館へ向かう学生が集中したため、結果として、図書館の英語多読用図書が不足する事態となった。自分のレベルに合った本が不足していること、また、クイズへの挑戦が1時間に1回と制限されているがために、最後に読書量を大幅に増やそうとしたが、効率よく増やすことができなかったこと等で、多くの学生が焦りを感じているようであった。Mason (2012) の報告においても、日本語による読書習慣がない学生が英語での読書に消極的な例に触れられているが、各自の興味のある分野について、和書も含めてまずは活字を読む習慣を身に付ける必要があると言える。

さらに、図書館の英語多読用図書が、必ずしもM-Reader上に登録されているとは限らず、M-Readerで検索をしても、所定の本が見つからない場合があった。そのため、クイズのない本の語数登録のために、語数を一つひとつ数えることに時間と労力を費やしている学生の姿も多く見られた。読書をしてクイズを解くよりも、単語をひたすら数える方を自ら選んでいる学生さえもいた。中には、学部・学科の枠を超えた学生間で、オンライン上に登録されていない本のタイトルや単語数を共有し、実際に読書をしたり、単語数を数えたりすることなく、オンライン上の語数登録のみを行っている学生も少なからずいるようであった。

(2) 教員および指導体制における課題

まず、各クラス担当教員間での多読活動に対する共通理解度に僅かながら差が見られたということである。そのため、学生間で、クラスや担当教員によって情報の錯綜が見られ、様々な情報や憶測が飛び交い、一部の学生の間で混乱を招く結果となった。特に、多読での目標語数に対する考え方や成績評価のあり方について、十分な共通認識ができていなかったことにより、学生の英語多読に関する評価への不安や教員に対する不満等の声があった。全ての授業において共通の資料等を配付し、英語力や読書習慣形成のための英語多読の重要性について学生に説明を行っていたが、英語多読に取り組む意義の不明瞭さや目標語数過多によるやる気喪失、さらには、英語多読による他教科への影響等に対する不満が綴られたメモも匿名で寄せられた。

また、オンラインシステム上の課題としては、クイズのない本の語数登録が挙げられる。M-Reader上にクイズのない本については、NetCommons 2 を利用したウェブ上の専用フォームに学生は必要な情報（学籍番号、語数、本のタイトル、ISBN）を入力し、教員が全学生の情報を集約・確認した後、M-Reader上の個々の学生アカウントに対してAwardとしてCSVファイルを用いて一括で語数追加を行った。教員による情報の確認作業において、以下の4点についてはM-Readerに語数として追加しなかった。

- ・ M-Readerにクイズが登録されているにも関わらず、語数登録の申請があったもの

- ・明らかに語数がおかしいもの（極端に語数が多い場合など）
- ・存在しない学籍番号が入力されていた場合
- ・同じ本を2回以上登録している場合

上記作業については個々の学生の情報を確認する必要がある、733名におよぶ学生についての作業としてかなり煩雑となった。そのため、毎月月末を目処にM-Readerに語数追加の作業を行っていたが、学生からはM-ReaderのTotal Wordsがいつまで経っても追加されないといった不安と質問が多く寄せられた。また、M-Reader上のバグであるかは不明であるが、Awardとしてアップロードした情報（Book TitleやWords）が表示されない場合（ただし、Total Wordsでは語数は反映されている）や、Total Words自体が異なる場合などのトラブルがあり、M-Readerから取得できる全学生の記録データとクイズのない本の語数登録のデータを照会しながら、最終的な成績評価のための得点率を計算し、学生の取り組みに対して不利益が生じないように対応した。

5. 全学教養教育としての英語多読に関する考察

5.1 学生への指導のあり方

4.2（1）で指摘したが、定期的に授業外学習を行うことを習慣付けるよう働きかけをし、学習意欲・読書意欲を向上させていく必要がある。今回は、M-Reader上で1ヶ月毎に達成目標が設定されていたが、あくまでも目安程度という扱いでしかなかったため、今後は、各クラス担当教員が、1ヶ月毎の到達度の確認を徹底することで、学生の多読活動の習慣付けを図ることにつながる。また、学習意欲や読書意欲をかき立てるために、今後、授業等においてビブリオバトルの形を取り入れることも有効であると思われる。読書習慣が身に付いていない学生にとっては、他の学生のプレゼンテーションを聞くことで、本や読書に興味を持つことにつながるのではないかと考えられる。学生の学習意欲については、今回の授業で、受講後アンケートに以下のような感想も見られた。今後継続して、しっかりとその気持ちを後押ししていくことができるよう、授業等での働きかけも行っていく必要がある。

- ・英語多読に取り組んだ。自分のレベルにあったものを読むことで続けられた。これからも続けていきたい
- ・前期では多読がほとんどできなかったのですが、後期では少しでも多くの本を読んで学んでいきたいと思う
- ・多読は、始めるのが遅く、やり方が曖昧で、あまり進まなかった。短いものばかり読んでいたのですが、これからは少し長いものに挑戦したい
- ・1つ後悔しているのが多読です。英語に対しての苦手意識が強かったので、なかなか手を付けることができませんでした。しかし7月に入ってさすがに焦りを感じ読んでみると、level 1なら私でも簡単に読めて話の内容も理解することができ、とてもおもしろかったです。夏休みは暇な時間があるときに読んでみようと思います
- ・まだまだ知らないことも多いと思うので、多読をしたり、単語を1つでも多く覚えたりしていろいろなことをやっていきたいなと思います
- ・多読は特に自分の力になったと思うし、これからも継続していきたいと思った

成果では、英語多読による英語力向上について実感している学生がいると述べたが、これは英語読解力等Readingに関連した力に限られるものであるため、それ以外のListening、Speaking、Writingの指導を授業中に深化させていくことも教員には求められる。また、学年が進行することによって、英語多読への取り組みが減少することについて、授業のみでの英語多読実施ではなく、授業とは無関係の英語多読サークルや英語多読ゼミのような形で有志の学生による集団形成を図り、継続的な支援を専任教員が中心となって取り組んでいくことも必要であると考えられる。

学生間における情報の混乱は、学生の多読活動への意欲低下へとつながる可能性があるため、教員間での多読活動に関する共通理解をさらに深める必要がある。そのため、定期的に可能な範囲でミ-

ティングを実施したり、メールやウェブ等を活用して、情報共有を図り、各教員の取り組み状況や指導内容を適宜把握しながら指導を進めていかなければならない。今回の実践では、特に、語数だけが目標値であるかのように学生に説明していたことを反省しなければならない。実際に、M-Reader上にクイズのない本の語数自己申告方式について、十分内容を理解していない、または、読んでいないにも関わらず登録をしている学生に対して、まじめに取り組むことに不公平感を感じ、やる気がそがれている学生もいる。そのため、クイズで合格した本の語数と、クイズのない本の語数では、得点率に差を持たせたり、また、クイズで失敗した本についても主体的な取り組みとして正答数に応じた得点を与えるなど、成績評価では工夫を行った。しかし、評価面での工夫のみでは、学生にとって多読への意欲向上につながることはなく、引き続き、学生に対して、語数のためだけの英語多読とならないよう留意させる指導が必要である。

5.2 英語多読用図書のある方

本学図書館において蔵書を増やすことが全学展開の前提として挙げられる。Graded Readersおよび洋書・英語絵本に割り当てられている分類番号の貸出者数と貸出冊数については表2の通りである。表からも分かるとおり、英語多読に取り組む学生数の増加に伴い、貸出者数、貸出冊数の両方が増加している。そのため、大学全体で多読活動を行う場合、十分な本の冊数の確保は必須であり、今後も適正な図書冊数が必要となる。酒井ら（2005）では、古川昭夫氏の計算式を紹介しており、「500冊＋5冊×生徒数（生徒100人まで）」としている。本学では、700名を超える学生が取り組んでおり、この計算式に単純に当てはめることはできないが、参考値として、700名と想定すると約4,000冊が必要となり、さらに2,000冊追加しなければならない。

当然のことながら、以下のような意見から、学生が興味を持っている分野の本を読むことができるようより幅広い選書を行っていく必要がある。

- ・もともと本を読む習慣のない私は英語の本を読むなんて全く無理だと思っていたが、図書室には様々な本があり、日本でも有名な話の本であったり初心者から上級者向けといった幅広いレベルを取り揃えており、楽しく学ぶことができた
- ・多読をもう少し頑張ろうと思ったし、多読にも英語の料理のレシピ本などがあれば作って理解するのもおもしろそうだと思うので、挑戦してみたい。私はcare bearという外国のアニメのキャラクターが好きなので、その物語の本があれば読みたいと思う

学生の興味・関心のある本という観点だけではなく、学生の英語力なども考慮しながら学生が読みやすいレベルの図書の購入を進める必要がある。図書館では複本（同一の本が複数冊あること）の基準があるため、難易度の低いものから高いものまでバランスよく蔵書されていくことになるが、学生の英語多読で読んでいるGraded Readersのレベルを確認しつつ、学生のレベルに合った図書をより多く揃えていく必要があり、英語多読で用いる図書の複本については柔軟に対応してもらおうよう大学にも働きかけていかなければならない。

また、M-Reader上にクイズが登録されている本を本学図書館により多く配架していくことにより、学生が単語数を数えることに費やす時間を削減することができる。さらに、学生間での、オンライン上に登録されていない本に関する情報の共有を抑制し、不正を妨げることもつながる。

表2 本学附属図書館の英語多読用図書貸出者数と貸出冊数の推移

	2015 年度年間 (2015.4.1～2016.3.31)	2016 年度年間 (2016.4.1～2017.3.31)	2017 年度前期 (2017.4.10～2017.7.31)
貸出者数	132 名	584 名	689 名
貸出冊数	132 冊	2,141 冊	7,548 冊

5.3 全学展開のあり方

全学展開において3点考察する。

まず、継続性の問題である。本学において寺西ら（2004, 2005）の多読指導実践以降、多読指導がなされたという記録がない。また、専任教員の意向によって容易に多読指導が導入されたり廃止されたりするのは、読書といった継続的な学生の取り組みを阻害することになる。そのため、全学展開にすることによって、専任教員が変わったとしても、継続的に実施することにつながられる。ただし、専任教員や非常勤講師に変更があった場合は、十分な引き継ぎや説明を行い、取り組みを継承していくことが必要である。

次に、オンラインシステムの活用である。学生は多読活動をオンライン上で報告することにより、一括管理のもとデータの集計や処理を速やかにタイムリーに行うことができるようになった。また、オンラインシステムの管理については、複数教員で管理することも可能であるが、操作方法についての教員の学習負担を軽減するため、複数の教員による語数追加等の重複した操作を防止するため、そして、学生のデータ削除等誤操作を防止するために、専任教員1名が担当し行った。今回の取り組みでは、管理担当の教員が、毎月月末に学生の読書状況を整理し、M-Readerからデータをダウンロードし、全ての英語担当教員に報告する形を取った。しかし、上述のような理由で管理担当の教員に全ての運用を任せるのではなく、各授業担当教員が学生の進捗状況を常に確認しながら指導すべきである。今後は、英語多読指導に関わる全ての担当教員がオンラインシステムを活用できるような体制にしていこう。

最後に、全学展開において最も重要なのは、英語多読教育導入に対する大学の考え方である。本学の建学の精神は、「念願は人格を決定す、継続は力なり」である。英語は苦手であるが英語力は向上させたいと考えている学生が多い中で、継続して一定量の英文の読書に取り組むことによって英語力を高め、成長を実感することができる点では、本学の建学の精神にも合致している。また、事前に学長以下役職者が集まる改革会議において、英語多読教育の本学への導入について説明を行い、図書館への英語多読用図書の購入等についてもご理解をいただいた。その後も、図書館職員の方々とも配架方法や今後の蔵書計画等について協議を重ねた。今後も継続して、学生に英語多読教育を展開することで、本学の建学の精神を具現化していかなければならない。

6. おわりに

本論では、本学における全学教養英語教育への英語多読教育導入および実践について概説した。オンラインシステムの活用により全学で共通した取り組みを実現することができた。また、英語多読指導について先行研究等でも指摘されている同様の学生への成果が、本実践でも見られたことは、一定の効果があったと考えられる。一方で、全学導入ならではの課題も明らかとなった。特に、担当教員間での共通認識の重要性については、再認識することができた。ただ、本論は、担当教員全員で執筆しており、こうした共同での紀要執筆につながったことは大変大きな意義があり、成果や課題について共通理解を深めることにつながったと考えている。今後も本学における全学体制での英語多読教育をさらに発展させていきたい。

謝辞

本学における英語多読教育は、洋書新規購入に係る学校法人作陽学園によるご高配、M-ReaderやERF Placement Test、NetCommons開発に関わっておられるご関係者の方々のご成果によって、全学導入が可能となっております。この場をお借り致しまして、深く感謝申し上げます。

参考・引用資料・文献

Bamford, J. Day, R.R. (2004). *Extensive Reading Activities for Teaching Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

- ERF Placement Test. (n.d.). Retrieved September 29, 2017 from <https://erfpt.ealps.shinshu-u.ac.jp/>
- The Extensive Reading Foundation. (2011). 国際多読教育学会による多読指導ガイド.
- Krashen, S.D. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. New York: Longman.
- くらしき作陽大学 作陽音楽短期大学. (n.d.). Retrieved September 29, 2017 from <http://www.ksu.ac.jp/>
- Mason 紅子. (2012). 多読を成功させる条件. 四天王寺大学紀要, 54, 351–366.
- M-Reader. (n.d.). Retrieved September 29, 2017 from <https://mreader.org/>
- NetCommons2 公式サイト. (n.d.). Retrieved September 29, 2017 from <https://nc2.netcommons.org/>
- 酒井邦秀, 神田みなみ. (2005). 教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ. 東京:大修館書店.
- 白畑知彦. (2009). 英語習得の「常識」「非常識」—第二言語習得研究からの検証. 東京:大修館書店.
- 寺西雅子, 松浦加寿子. (2004). 多読指導法の実践とその効果. くらしき作陽大学 作陽音楽短期大学研究紀要, 37 (1), 67–78.
- 寺西雅子, 寺西雅之. (2005). 学習者の個人差に対応できる授業形態の模索—英語多読授業における電子辞書の持つ可能性. くらしき作陽大学 作陽音楽短期大学研究紀要, 38 (1), 231–243.
- 雪丸尚美. (2012). 大学生に対する英語多読活動の成果と課題. 西南学院大学言語教育センター紀要, 2, 21–36 : 30.

目指せ英語 100 万語読破！！

英語多読活動の取り組みガイド

(英語 I・II・III・IV・V・VI 共通)

[English, 2017]

1. 英語多読の紹介

多読とは、学習者が自分にとって易しい英語の本を楽しく読んで、読書速度を上げ、読書を流暢にできるようにすることです。多読の目的は、学習者が読解力を高めるのを助けることであり、英語自体の勉強のために本を読むことではありません。

《多読三原則》

①辞書は引かない

②分からないところは飛ばして、楽しく、速く読む

③十分に理解できない難しい本や進まなくなった本は、読むのをやめる

ただし、辞書を引かずにたくさん読んでも、語彙力、文法能力、発音能力は上がりません。向上するのは読むスピードだけ。多読三原則にとらわれず、自分の興味関心のある読み物を積極的に読み、様々な学習方法を取り入れながら、自分自身の英語力に関する課題を克服してください。

2. Graded Readers の活用

Graded Readers (GR: 段階別読み物) とは、英語学習者が、読書スピードや流暢さを身に付け、読書「そのもの」を楽しむ機会が持てるように書かれた本です。語学レベルに合わせて、少しずつ難易度が上がっていくように書かれており、レベルごとに、物語の複雑さ、文法や語彙、挿絵の量がしっかりコントロールされています。レベルの低い本や挿絵の多い本などから始めて、徐々に難しい本へ移行しましょう。

くらしき作陽大学附属図書館 2F 書架には GR が配架されていますので、各自でレベルに合った本を選択して、読むことができます。友だちと面白かった本を積極的に情報交換しながら活用してください。

3. どのレベルから始めるのか

◎分速 150 語～200 語以上で読めるもの。初級者の場合はもう少し易しいものから始めましょう。

◎オンラインで自分のレベルを確認することができます。まずはやってみましょう！

1) ERF Placement Test ページにアクセスします。

<https://erfpt.ealps.shinshu-u.ac.jp/> (右 QR コード)

2) 「find your level now」の「click here」を選択します。

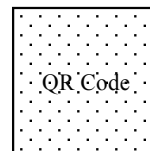
3) 「Take the test」の 2 つの項目を入力します。

・ school and teacher → 「Kurashiki Sakuyo University – **** *」を選択

・ student number → 学籍番号を入力

4) 「Take the test」を選択し、テストを受験します (所要時間: 10～15 分)。

5) テストが終わると ERF レベルが表示されますので、下表で読む本のレベルを確認してください。



ERF level	Beg.				Elem			Int.			Upper			Advanced		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
YL		0.4 - 0.5	0.6 - 0.7	0.8 - 0.9	1.0 - 1.1	1.2 - 1.4	1.6 - 1.8	1.8 - 2.2	2.2 - 3.0	3.1 - 3.7	3.8 - 4.5	4.6 - 5.2	5.3 - 6.0	6.0 - 6.8	6.8 - 7.5	
Penguin readers			Easystarts	1		2			3		4		5	6		
Cambridge				Starter	1		2			3		4		5		6
Macmillan			1	2	3		4				5 - 6					
Oxford				Starter	1		2	3		4	5			6		
Scholastic				Starters		1		2		3						

◎この ERF Placement Test は各期末にも再度受験し、ERF レベルに変化があったか確認しましょう。

4. 英語多読による学習目標

◎4 年間で 100 万語 = 1 年間で 25 万語 = 1 ヶ月で 2 万語 = 半期で 8 万語読破を目指しましょう。

*10 万語～20 万語程度までは読書自体が苦痛に感じるかもしれませんが、徐々に読むスピードが速くなっていることを実感することができ、読むスピードが速くなればリスニングにも効果が出てきます。

5. 学習成果の記録方法

◎本を読み終えるごとに、M-Reader 上でクイズを受験し、合格すると語数が追加されます。

◎M-Reader は在学期間中継続利用できますので、授業終了後も語数を追加していくことができます。

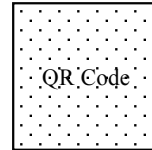
1) M-Reader のページにアクセスします。

<http://mreader.org> (右 QR コード)

2) 以下の手順でユーザー登録を行います。

①ログイン欄の右にある「New users, click here to register!」を選択します。

②各項目には以下の内容を入力します。



Enter your access code here:	***** (小**・小**・大**・大**・数**・数**・小**・大**・数**)
Family name:	姓 例: Sakuyo
Given name:	名 例: Taro
Your ID number:	ksu-***** (*****は学籍番号) 例: 1791102 の学生の場合「ksu-1791102」となります。
Choose a password:	任意のパスワードを入力します。
Your email address	メールアドレス (メールの種類は問いません)

※パスワードとメールアドレスは後で変更することができます。

③「submit」を押すと登録が完了します。

3) 以下の手順でクイズを受験します。

①M-Reader にアクセスの後、ID とパスワードを入力し、「Go」を押すとログインします。

②「Select the book that you want to take a quiz on:」の下にある検索キーワード入力欄に、本のタイトルまたはその一部を入力し、「Search」を選択し検索します。

③自分が読んだ本と同じカバー画像を選択し、クイズの受験を開始します。

★【重要】M-Reader 注意事項★

※本のカバーデザインが変更されているものもあります。また、同じタイトルの本が複数ある場合があるため、出版社とタイトルが一致しているかを確認してください。

※各本には 20～30 問あり、その中から 10 問がランダムに出題され、60%以上で合格となります。

※本を参照しながら解答しても構いませんが、クイズは制限時間内 (15 分) に終了する必要があります。

※一度受験したクイズは、可否に関わらず再度受験することはできません。不合格の場合、語数は追加されませんので、しっかりと本を読んでから解答してください。

※クイズの答えを他の学生に教える等の不正行為はシステム上で検出されるのでしないこと。

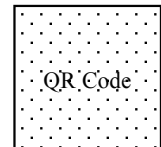
※クイズは受験後 1 時間経過しなければ、別の本のクイズを受験することができません。

◎M-Reader でタイトル検索しても「No books found.」と表示される場合があります。それは、クイズが用意されていない本を意味します。そのため、クイズのない本の語数の追加を行う場合、https://**.*.*/er/ (右 QR コード) へアクセスし、追加連絡をしてください。

確認ができ次第、M-Reader に語数を追加します。ただし、クイズがあるにも関わらず報告した場合は、M-Reader に反映しませんので注意してください。

※ISBN は、本の裏表紙等に記載していますので、間違いのないよう入力してください。

※Graded Readers 以外の英語で書かれた本でも ISBN の記載があれば、語数追加の対象とします。



6. 困った時の問い合わせ先

◎授業や評価、また、英語に関する質問は、担当の先生に問い合わせましょう。

◎ERF Placement Test や M-Reader の技術的な問題は、*** **先生 (*号館*階***室, *****@ksu.ac.jp) に問い合わせましょう。

【参考文献等】

The Extensive Reading Foundation. (2011). 国際多読教育学会による多読指導ガイド.

酒井邦秀, 神田みなみ. (2005). 教室で読む英語 100 万語—多読授業のすすめ. 東京: 大修館書店.

白畑知彦. (2009). 英語習得の「常識」「非常識」—第二言語習得研究からの検証. 東京: 大修館書店.

